

復興ワードマップ・パラダイム研究会(第16回)速記録

日時: 2020年9月18日(金)9:30~11:40

場所: Zoom オンライン

参加者: 近藤、木戸、李、石原、宮前、大門、高原、立部(記)(敬称略)

今回は、メンバーが最近関心を持っているテーマに関する話題提供を順番におこない、それらについて議論した。

➤ 木戸(震災アーカイブ)

- ・阪神・淡路大震災の取材映像のアーカイブを公開した。38 時間分、2000 クリップを荒編集していたもの。これを恒常的に公開する。これまでは、人の顔が写っている映像の肖像権の問題などで公開に及び腰だった。震災から 25 年たって、被災した方の心の復興も進んできたのではないかという考えで公開に踏み切った。
- ・阪神・淡路大震災は、放送業界的にも特異な出来事だった。伊勢湾台風はテレビのプレゼンスがない時代に起きた。東日本大震災の時代になると、携帯電話のカメラなどで撮影された動画のアーカイブが多い。しかし阪神・淡路大震災は、おそらくテレビ局しか動画をしっかり撮っていない。テレビ局が公開しなければ、動画の記録が活用されることなく、やがて死蔵されてしまう。
- ・災害の映像は「社会財」として公開していかなければいけない。阪神・淡路大震災以降の放送局が持っている災害の動画資料も、肖像権の問題があるため「すべて」というわけにはいかないが、「できるだけ」公開していきたいと思い、水害など、別の災害アーカイブも準備をしている。この秋から順次公開していきたい。
- ・いま、震災アーカイブが各方面から評価をもらえていることは後押しになっている。

コメント

- アーカイブのパラダイムシフトという意味で、いろいろなところで発表してもらい、知ってもらいたい。アーカイブと言えば、立て付けとしては死蔵してしまうことも多い中で、生きた財産として、社会財として、公共のコモンズとして有意義だ。大きなシフトチェンジ。
- 映像に映っている方からの実際の反響は？
 - (木戸)大半の方からは許諾がとれていない。肖像権の法律を確認して、いけると判断した。映像を持って現地に行き、30 名ほどの人に確認した。「(映っているのは)あの人だ」とわかる人がいた。公開について確認すると、「25 年たったし、東日本大

震災もあったしなあ」と言ってやんわり許可された人もいた。「25 年前にインタビューに答えたが、それはもうみなさんに預けたもの。肖像権など四の五の言わず、役に立ててもらえるなら公開してもらって構わない」と積極的に後押ししてくれる人もいた。おばあさんが映っているのを見つけた孫が、映っていることを心配して母親に相談したところ、母親は「生きていた時の母の声がまた聞けるとは思わなかった。むしろいいではないか。それが永久にアーカイブで残してもらえるならありがたいこと」と言っていた。印象深い感想がたくさんあった。

- 被災写真の返却活動で出てくる感想ととても似ている。
- そのつながり自体をロケしてクリップできるとさらに発展していく。NHK の震災アーカイブスには「防災学習のページ」がある。アーカイブした後の活用の仕方、反響の広がり、みんな関心を持っていると思う。
- 台湾では動画アーカイブの動きはある？
- 集集大地震の博物館や研究所でのアーカイブはあるが、テレビ局で大規模にアーカイブされたものはない。
- アチエや東北でも、実物よりもデジタルアーカイブが進んでいる。デジタルアーカイブではクレームを恐れてモザイクをかけるなどして、二の足を踏むことが多い。震災アーカイブではクレームはあったか？
 - (木戸)「公開しないでほしい」という声が出ることを予想していたが、クレームは今のところ一件もない。25 年たっているということや、その後、東日本大震災が起きたということも大きい。東日本大震災で同じことをやるとクレームが来る可能性もある。ただ、二の足を踏む人たちに対しては、クレームは来ないということの証明にもなればと思う。

➤ 宮前(防災原病)

- ・現在の防災のパラダイムが「逆効果」になっているのではないか。
- ・防災が透徹しつつある日本社会。全国どこでも避難訓練がおこなわれている。避難訓練の体験率はほぼ 100%。自主防災組織の組織率は 82.7%(2017 年)。何らかの災害ボランティアの経験のある人は約 400 万人。建物の耐震化も進んでいる。
- ・一方で、その反作用もある。避難訓練のマナー化。災害ボランティアの不足。その前提には、行政がなすべき仕事を自助や共助に押し付けているという構造もある。秩序化のドライブもかなり目に付く。復興工事によって「ふるさと感」が失われる、復興による喪失もある。目標への疎外化が起きている。
- ・イリイチの「医原病」という概念をもとに論じていきたい。医療制度の透徹によって、新たな病気が出現するという。臨床的医原病、社会的医原病、文化的医原病があるが、特に後者の二つが重要。医療が発展することによって、医療によって扱われる範囲が増え、病気とされる種類が増えている。もともと自分たちで何とか出来ていたもの(老いや痛みなどを、

すべて医療に任せてしまう。

- ・これと全く同じ状況が防災にもあるのではないか。「防災意識」「ボランティア不足」「秩序化のドライブ」「集合的否認」。これらの考え方の根底には、防災の透徹によって、かえって脆弱な社会になっているということがある。
- ・ただし、こういう指摘は特に新しいものではない。ウルリッヒ・ベックの「リスク社会」でも指摘されている。ただ、ベックの議論は極めてマクロ的なもの。現場の一つひとつの実践ではその分析軸が役に立たないことも多い。ミクロな視点で分析する枠組みを探していた。
- ・そこで注目したのが、バイトソンからワツラウィックへ、「偽解決」という考え方。解決してしまうことで問題は維持される。ワツラウィックの比喻で言うと「悪夢の中でもがくことで、悪夢から覚めるという解決方法は遠ざかっていく」。災害に対して誤った方法で防災することで、本来解決すべきだった問題は(かえって強固に)維持される。
- ・例えば避難訓練に当てはめてみる。震災時に困らないように備えておくという訓練をしてアンケートをとってみると、「防災意識」は高くなっている。行政がお願いしたら実際に参加者が増える。その結果「防災力が高まった」と考えてしまう。これが偽解決。誤った解決がなされることによって、災害時に本当に取り組まなければいけない地域の課題は見過ごされてしまう。見過ごされているのに、「防災力が高まった」と思って安心してしまう。
- ・「防災意識」がどうこうというよりも、そもそも防災意識を高める手段が間違っている。であればどういう実践を行うべきか、ということを考えていきたい。

コメント

- 昨年の復興学会のまとめが「手段の目的化」だった。目的を解決するためのよい手段だと思っているうちに、負のスパイラル、逆機能に陥っていくというテーマは、昨年の問題をさらに先鋭化させることができる。
- イリイチに関して、問題構造をとらまえる(病院化・学校化の議論)ことまでは押さえたうえで、そこから先はどうなのだろう？
- 病気というメタファーを使うことには正負両面ある。そこを、もう一段階、二段階上で突破できることがあるのではないか。
- 間違ったやり方があるとして、結局、それを解決して防災の強化につなげるということなのか？ いやそうではないということなのか？
 - (宮前)防災の強化と言う時、それがどういう防災を指しているのかという部分から変わらなければいけないと思う。どういう問題構造が裏にあるのかというのを明示したい。
- イリイチを入口にすると、問題構造がくっきりとわかるようになる分、そこから先をどうしたらいいのか、思考停止してしまう人も多い。そこから先も示してもらえれば。

➤ 近藤(テューモス、コミュニティとネットワーク)

- ・昨年の復興学会大会の分科会で出てきた「手段の目的化」「集合的否認」などの課題について再度おさえたうえで、課題への糸口を探索したい。
- ・フランシス・フクヤマ著、『アイデンティティ』。人々が世の中をどう突き動かしているのか。過去の哲学的な営みから、テューモスという概念によってまとめている。テューモスには二つある。一つは、アイソサミア(対等願望)。対等に承認してほしい。互いにリスペクトしあって、平等な社会を生み出す原動力になっている。もう一つはメガロサミア(優越願望)。「すごいね」という承認を欲求している。これがために、競争、足の引っ張り合い、非難が起きる。また、過剰に頑張る、より良いものを目指す、バターメントに留まらずスーパーベストへ向かうということも起きる。政治的な混乱、社会的な排除も繰り返される。ここまでがフランシス・フクヤマの課題設定。
- ・では、それをどう乗り越えればいいのか。フランシス・フクヤマは、「社会が小さく自己本位的な集団に分割されるのなら、もっと広く統合的なアイデンティティを創出することもまた可能はずだ」と希望的観測だけ述べている。従来は小さな集団が統合されて大きくなるという向きだが、逆向きのやり方、トクヴィルのな、中間団体をもう一度活性化することに注目しているようだ。
- ・中間的なコミュニティをどうするかという問題は、見田宗介がずっと議論している。最も有名なのは 4 象限。縦軸は、意識的か、無意識的か。横軸は、ゲマインシャフト的か、ゲゼルシャフト的(社会契約的)か。第 1 象限は家族のような「共同体」。そこから始まり、右側の「集列体」に行くと、企業のような組織になる。無意識的に放り込まれている集合。医原病なるものも生まれるだろう。その上に行くと「連合体」。NPO など、自分の意思で集まり、何らかの目的に向かう組織。その左に行くと、連合体の交響体として、それぞれが意識的に集まっている中で、それぞれが溶け込んでいるような、ゲマインシャフト的なゲゼルシャフト。
- ・見田宗介は、交響体というコミュニティが集列的にいくつも連合することを〈モデル 0〉とし、現実的な姿として見ている。このような人々のつながりやコミュニティの集合は、想起すること自体はできる。ただ、例えばあるコミュニティが被災した時に、テューモス＝承認欲求や優越願望があると、なかなか手を取り結べないこともある。苦しんでいる被災地を見た時に、「こっちも大変なんだけどね」「わかってはいるが仕方がない」「被災地なのに他よりも上を行こうとするのか」と比較して、お互いがあるがままに承認し合うことがなかなかできない。被災地同士だけが取り結ばれていればよいとして、シャットダウンしてしまう。集合的否認になる。これをどう乗り越えればよいか。見田宗介の〈モデル 0〉を、もっとダイナミックにとらえられないか。あるいは、個人・小さな集合体からより良きネットワークを結ぶにはどうしたらいいか。関係の結び結び方を考えたい。
- ・コロナ禍での最近の取り組み。学生が動画を作って Web にアップし、ゼミで関わってきたフィールドの方と Web を通して交流している。学校になかなか行けない子供たち向けに各科目の教材を動画で見てもらったり、防災のコンテンツも見てもらおう。二つ発見があった。

それぞれ、「〇〇小学校のみなさん」など宛名がついた動画になっている。すると、他のフィールドの方も参考にしてくれて、思わぬところで輪が広がっている。「未就学児向けの動画も欲しい」「高齢者施設でもこの体操の動画を使いたい」など。また、これまで一つのフィールドにしか関わることができなかったのが、他のフィールド同士をつなぐこともやりやすくなった。Web 社会をうまく組み合わせることが、ネットワークを組み替える、あるいはネットワークの閉塞している部分を突破する入口を作れるのかもしれない。今後もっと理論化したい。

- ・被災地とのかかわりを、個人や一つの組織が持っているところまではよしとして、その場で起きている閉塞、逆機能をどうやって補正し合えるのかという部分をもう少し考えたい。テューモスやネットワークのあり方という地平で検討したい。集合的否認の先をどのようにつくるかを考えたい。

➤ 李(変革と復興)

- ・台湾の質的研究の本の書評を書いている。1996 年出版。当時の台湾では量的研究がメインで、質的研究がなかなか取り上げられていなかった。今でも大学の質的研究に関する指定教科書。1995 年くらいの地方の女性について研究している事例が扱われている。
- ・冒頭には、「ただの量的研究は社会変革の力にならず、質的研究には生命力と社会価値がある」と書かれている。当時の社会学は、社会を記録するだけでなく、社会を変えようとする意識が強い。台湾の民主制が始まり、社会の変動が激しい時代。
- ・普通、ストライキを描写するならば、ストライキに参加している時の様子が描かれることが多いが、この本では、ストライキ後に女性が会社に戻ってからどういう待遇を受けたかを描いている。ストライキ終了後、女性は男性と比べて解雇、嫌がらせなど差別的な待遇を受けやすかったという。今でもこういう問題は存在する。
- ・取り上げられていた他の事例にも共通していることは、「男は外、女は内」という価値観に対してその女性は、自分では抵抗しているにもかかわらず、自分自身は次の世代(自分の娘や義理の娘など)に対して再生産しようとする。
- ・変革社会、女性に対する抑圧をやめようという意識があるのに、25 年前に提起されている問題が、現代ではさらに拡大・深刻化している。では、これまでにいつ、どういう変革があったか。例えば女性がスカートではなくズボンを履くようになったタイミングは？
- ・被災地の復興に変革はあるのか？ 大きな変化は求められているのか？ 元の生活に戻るだけでよいのか？ 変革があるとすればどのタイミングで起きたのか？
- ・日本と台湾で、変革に対する考えや経験の違いがある。日本は安定していて、大きな変革はあまりない。台湾は植民地時代以来、いろいろな変革があって今の台湾に至る。
- ・台湾はこれまで国際社会の中で無視され、弱者の立場だった。特に 2000 年代に入ると、自然災害の頻発、地価の高騰、中国からの圧力、問題を解決できない政府といった状況で、台湾の若者は台湾を「鬼島」と呼び、海外に出たがっていた。ところが今、コロナ対応の成功

によって、これまで抑圧されてきた台湾の国際的地位が向上した。医療物資などを諸外国に支援した。それによって急に台湾人自身の自信がついてきた。コロナは台湾に変革をもたらす契機になっている。寄付やボランティア参加、SNS による意識の共有など、よりよい社会に向けた実践が行われている。

- ・各国のコロナ対策を調査している。台湾では、1 月から徹底的な防疫対策をおこない、4 月 15 日以降感染者がゼロになり、社会が落ち着いた。調査チームで「いつまでの対策を扱うか」「感染拡大初期だけでよいのでは」という話になった時に気づいたことは、台湾のコロナ対策はずっと変化しているし、今もまた新しい政策を出そうとしている。その感覚は日本とは違う。

コメント

- フェミニズムの観点から引き出せることがあるとすれば、植民地支配の話に行き着くと思う。改革は「おっちゃん」が好きな言葉のような気がする。
 - (李)日本人は改革に対するイメージがあまりよくないと思う。台湾の選挙での決まり文句は改革。
- それは日本も同じだと思うが、「おっちゃんがおっちゃんのために行う改革」になっている。おっちゃんの中の権力闘争の改革。下の部分は何も変わらない。認識のやり方自体を引かせるようなやり方、という点に男性がフェミニズムに関わる入口があると思う。女性にとってのフェミニズムはそれとは別だと思う。
- 根っこの部分から変えるという改革に対して日本は及び腰。フェミニズムは、根底的な部分、生物学的な意味合いから矛盾や課題を乗り越えようという姿勢を持っている。「おっちゃんたち」は、深い部分の議論までされてはかなわない、余計なことはしてほしくないと考えている人が多数派だと思う。台湾では議論がアクティブだということはよくわかるが、冷静に見ると、議論はしても根底の部分は変えないという勢力も強い可能性がある。そのあたりも比較できると、より深い考察ができると思う。テクニカルな部分やシステムの部分で台湾が進化していることは世界も注目しているが、それでもなお変えようとしていない部分もあることを、ジェンダーやフェミニズムの議論から見据えることができるのではないかな。
- 例えばフィリピンの貧困層で言えば、復興の場面でも、ひとまず元の生活に戻った、被災からは回復したという部分と、それでも根本的な問題は変わっていない、どうにかしたいというエネルギーがある。ただ、自分が現場で出会っている人はそういう変革の意識を持っている NGO などと交わっている人たち。NGO は「次の災害に備える」ためのテクニカルなことだけでなく、フィリピンの抱える社会問題がどう災害とつながっているかなどを被災した人に伝えていた。災害がそういう根本の部分に意識を持つきっかけにはなっているかもしれない。ただ、熱い意識を持った NGO の人もいるが、同時に「みんながみんな問題意識を持っているわけではない」ということも NGO の人は言っていた。
- 深さ・浅さだけでなく、中心・周縁という問題。中心で議論し、闘う人たちがいるとすれば、

周辺にはサイレントな人たちもたくさんいる。サイレントな人たちや別のスピードで生きている人たちが捨て置かれるということが見失われがち。フェミニズムの中にも闘争がある。闘い続ける人たちに対して、「そういうものだけがフェミニストではない」という人たちが大量に生み出されてきた。「台湾」「被災地」という大きな括りで話していること自体の落とし穴もあるだろう。

➤ 高原(自然と偶然)

- ・昨年石巻市に行った時に会った地元の人から、「たまたま助かった」と語る表現が多数出てきた。震災の証言集にも、「偶然」「たまたま」という言葉がよく出てくる。
- ・野田村に行った時、休止路線の線路のそばを自動車で走っていた。普段は剪定されているであろう草木が覆いかぶさっていた。ここに人間がいなくなったら、数年で全部森になるのかと思って 驚いた。災害や復興を考えると、自然と偶然の問題にどうしても行き着く。
- ・自然と偶然は何か関係があるのではないか。災害復興は、自然と偶然の問題を本当に取り込んでいるのか。
- ・私たちが「自然」という言葉でどういうイメージを持つか。「自然には二面性がある」とよく言われるが、自分はこの表現に不満がある。勝手に自然を人格化して適当に扱うなれなれしさがある。自然の側で二面性を切り替えて接しているわけではなく、自然は自然のルールで動いている。「恐ろしい面と恵みの面がある」という表現は、自然そのものの姿を覆い隠しているのではないか。
- ・では、自然そのものの姿とは？ 人間が傷つけても、それに対して自然独自の姿で滅んでしまったり回復したりする。加害者の人間と被害者の自然という構図は成り立たなくて、自然は自然それ自体において回復しうる。そういう恐ろしい原理があるのではないか。二面性という言葉では解釈できない。自然を保護・搾取の対象として本当に扱えるのか？ 認識の対象以前に、認識の作用を支えるものとして自然がある。
- ・自然は人間から発見されるのを待っていると同時に、向こうからこちらに気づいてほしいとノックしてくる。口内炎、月経、セミの鳴き声など。自然のものと気づかれることなく生じて、やんで、引き戻す。「おのずから」。さくらももこが妊娠した時の体験を書いたエッセーのタイトルが「そういうふうにできている」。
- ・自然そのものの何かに触れるということが、同時に偶然の体験でもある。今の生活は必然や合理性のもとに動いているが、自然の中でやっとな偶然性を回復するという契機がある。災害はそれを一番強烈に、両方をこんがらがらせて突き付けてくる。
- ・学問は偶然性をきちんととらえられるのか。偶然は必然性を組み立てて成立している。本当に偶然性というのを深い意味で取り込んだ学問はできるのか。できないとすれば、災害をめぐる学問は偶然と自然を本当にしっかり取り込めるのか。

→ 中村雄二郎、たとえば『共振する世界』などに記されたコンセプトでは、宇宙のリズムとの共振・共鳴によって物事をとらえ直す。偶然というのは、倫理の根底を支えるのか失うのかということの分岐点のようにも思う。

➤ 大門(暇と退屈)

- ・野田村で読書会を始めた。まちづくりについて学び合う。月 1 回、3~4 人で細々とやっている。本が野田村での実践のテーマの一つ。
- ・「暇」について考えている。コロナで緊急事態宣言が出て、みんな家にいるという時の「暇」。「セント・ジェームズ・インファーマリイ」というジャズの曲がカミュの『ペスト』に出てくる。曲がずっと流れ続けて、最後に言われるのは「こいつの正体は、繰り返すこと」。何もすることがない、何でもできるという暇さとは何なのか。
- ・普段多く人は仕事に追われていて、暇があるといいと思っている。それがコロナになって、実際暇になった。そういう時に変化の契機となるものが起きてもいいものだが、起きそうにない。暇な時こそ新しいものが出てきていいのではないか。
- ・デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ』。労働者の約 4 割が、自分の仕事がなくなっても誰も困らない、なくなった方が、社会がよくなると思っている。
- ・國分功一郎『暇と退屈の倫理学』。ハイデガーの考え方から、退屈とは何かを考えている。究極に退屈なのは、「何となく退屈である」という第三形式。第一形式は、何か暇、「プレゼンがつまらない」。第二形式は、何かに参加している時の暇、「パーティでしゃべる相手がいない」。コロナ禍では、第三形式的な、何となくただただ退屈だということに押し込まれている。國分功一郎は、第二形式をどう生きるかを取り戻さないといけないとしている。退屈さをどう引き受けるか。
- ・野田村では本をぶら下げて屋台をやっている。屋台はだいたい退屈。人もあまり来ないし、会話を交わすこともあまりない。通常は、退屈でなく何かまじめなことをやるというモードでいろいろなことが始められるが、退屈さを引き受けたうえで何かをつくるにはどうしたらよいか。
- ・コロナ禍で、行動履歴をつけ、買い物する時はあらかじめ買い物リストをつくり、無意味なことはやらないという社会の中で、誰とも会わず、ただただ退屈にすごす。第二形式の暇さをどう演出できるか。退屈の最中であって、何か新しいことができるはずなのに、出て来ないというのはもったいないと思う。これまで過剰にイベントがあり、人がたくさん入って来たはずの被災地の野田村で、偶然の出会いもなく、ただただ退屈という日常を送っているという反動は、復興期においてどう考えられるか。

➤ 立部(住民組織)

- ・フィリピンの住民組織など、住民組織を見ていく中で、その整理や枠組みを考えている。
- ・広島県坂町に住民福祉協議会という住民自治組織がある。強固な結びつきの集落をベースとした組織。2018年西日本豪雨の後、各地区の住民協が災害ボラセンのサテライトとしてニーズの収集、ボランティアの受け入れ、資機材の管理などを担った。これは平時から機能しているからこそ、災害時にも機能したというもの。ただ、住民協という枠組みが強いがゆえに、加入していない被災者のところにはボランティアが来ない、込み入った事情の家は対応されないなどの弊害もある。いわゆる「地縁組織」と言われる組織の、可能性と限界。
- ・玉野和志『近代日本の都市化と町内会の成立』。町内会を議論する時に、その担い手層や歴史的背景を見ることが重要だとしている。「行政の末端組織だ」「いや、もともと住民の自発的なものだ」といった議論があるが、そういう単純なものではないと。町内会とは、大正から昭和にかけての急激な都市化に伴う地域社会の「危機的状況」、新しい人が外から入ってくる、商売が脅かされるなどの状況に対して、住民自身が「共同防衛」のために結成した全く新しいタイプの地域住民組織だとしている。
- ・町内会の担い手を見る時に、大きく二つのタイプに分けている。「名望家支配型」では、リーダーはもともとその土地で伝統的権威を持っている。それに対して「エージェント型」は名望家支配型の崩壊の上に成立する。そこでのリーダーは個人的な手腕・人柄を認めてもらうことで権威を得る。ただし、行政の補助金など後ろ盾が必要。行政官僚機構からの自立性は弱く、行政の末端組織化してしまう。
- ・つまり、そもそも町内会は「地域性」をベースとしつつも、住民の「自発的な」「目的型」アソシエーションと言える。現代の被災地では、新しくできた災害公営住宅で「自治会がないと集会所が使えない」ということを行政から言われたり、地域の既存の自治会と公営住宅の自治会を一緒にするかどうかという話になったり。住んでいる人たちの必要に応じて、もっと柔軟な組織のあり方を考えていかなければいけないのではないかな。
- ・上野千鶴子が「縁の諸類型」を図式化している。上野千鶴子自身は「選べない縁」「選べる縁」という線引きをしているが、町内会の議論を見ると「地縁」と思われているものの中にも「選べる縁」と「選べない縁」があるだろう。「社縁」を「選べない縁」とするの、現代だとどうかという議論もできる。見田宗介の4象限のように、この類型化の中でも、分析軸を増やせるかもしれない。

コメント

- テンニースのゲメインシャフト、ゲゼルシャフトからどう発展させていくか。ゲゼルシャフトの中にゲメインシャフトの要素を取り込んだコミュニティは十分あり得る。今日のような研究会も、意識的に集まって目的を持ってはいるが、集まること自体によるこびを感じるというコミュニティにもなっていると思う。暇と退屈を共有しているということでもあるかもしれない。選ぶということがあれば、選び直す、ゲメインシャフトを意識化する、対自化するとい

う部分が、上野千鶴子の議論のポイントになると思う。見田宗介に展開する時に、一つの集合体と、別の集合体とのかかわりも見据えて社会や世界を見る。コミュニティ同士の関係性、被災地と非被災地など。これは上野千鶴子の議論には欠落しているかもしれない。

➤ 石原(手紙)

- ・手紙に注目している。動画の「宛先を明確にする」ということと共通している。手紙は宛先が明確にあるという意味で、書いた人にとっても大きな効用をもたらす。
- ・手紙を用いて震災のことを伝える取り組みもある。阪神・淡路大震災 25 年の時にやった長田の震災郵便ポスト、陸前高田の漂流ポストなど。
- ・関わってきた地域にコロナでなかなか行けなくなった時、学生は動画で伝えるということもやっているが、おじいちゃん、おばあちゃんに手紙を書くという動きも出てきている。
- ・徳島県阿南市の小学校で、手紙を用いた防災教育授業を行った。防災教育で学んだことを手紙に書いて、大切な人に贈る。ほとんどは手渡しで渡したが、手紙は封筒に入れて、切手を貼って、住所と宛先も書く。
- ・手紙の中身は見ない方がいいのではないかとということで、代わりにアンケートでなぜその人に送ったのかを書いてもらった。ある生徒がお父さんに送った理由は「いつも仕事で忙しいし、防災の話をおもしろくないから」。「もし自分一人で避難する時は、自分で避難できるし、みんな自分で動いて無事でいてほしい」と書いた。手紙がすぐれたメディアだということを改めて実感した。
- ・別の生徒の理由は逆にポジティブで、「いつも愛情込めて、少しだめなことがあったら必死に教えてくれるから」。「家族がいなくて一人で留守番している時に避難勧告が出た時は、親にわかるようにしてから一人で逃げようと思います」と書いた。本来的な防災の姿が手紙を介することで出てくるのではないか。
- ・また別の生徒の理由は「お母さんに『津波が来たらどうするの?』と聞いても、『津波なんか来ない』と言って聞いてくれないから」。
- ・うまくいかなかった部分。手紙を受け取った人のリアクションを聞くために、受け取った人にアンケートを書いて送ってもらうようにしたが、14 人のクラスで 1 通しか返って来なかった。
- ・その 1 通には、「海が目の前のまちなので、子供と道で歩いている時など津波のことを思い、避難経路の場所を考えることはよくあります。しかしその一方で、防災バッグなどの準備は一切していませんが、現状で子供はやっぱりよく見ているなと思いました」とあった。子供が手紙で書くということが、大人の感覚と違うところもあって示唆的。具体的なアクションにつながるきっかけになる。
- ・ニュージーランドのコロナ対策について。ボランティアの動きが示唆的。政府が中心になり、ボランティアセンターがボランティアするよう呼び掛けている。政府がコロナの警戒レベルに応じたボランティアのガイドラインを定めている。ボランティアセンターはローカル(都道府

県)レベルで設置されており、COVID-19 の支援 HP をつくっている。

- Neighborhood Support Group が興味深い。近隣で支援することをすごく呼びかけている。連絡網とコミュニティカードを用いた支援。電話で隣同士、困っている人の安否確認をすることを推奨している。自分から支援してほしいと発信したい人は、手紙に名前、アドレス、電話番号、支援してほしい内容を書いてボランティアセンターに提出する。必要なボランティアを募り、手を挙げた人が支援する。Web に 3 月中旬に掲載された「ボランティア活動できますか」という質問に対して「もちろんできます」と明確に答えている。距離を保つ、屋外で行う、オンラインを介して、という形になるが、「どんどんやってください」としている。ボランティアのあるべき姿という点で、ニュージーランドは進んでいる。
- クライストチャーチの地震の時に設立された学生のボランティア団体もコロナ支援をおこなっている。食料支援。スーパーに行けない高齢者の買い物代行を学生団体がやっていた。HP に必要な情報を入力すると、ボランティアの学生が受け取り、スーパーで購入して依頼者に届ける。日本のコロナ禍での状況が逆に浮かび上がる。

コメント

- 人がつながろうとすることの「自然」を、もう一度見出せるのかもしれない。でも一方で、それはとてもぎこちなくて、例えば現代は「家族」という関わりさえも、ゲマインシャフトでとらえることが難しい社会に生きているかもしれない。人と人との関係性、コミュニティのあり方、コミュニティとコミュニティとの関係性、ひいては社会のあり方を一望できる、そんな分科会を次回のオンライン大会で実施できるのではないかな。

以上